

SMF Press

Vol.25
March
2016一年間を
振り返ってよく衣食住とひとことによ
う。住文化を語るときにはことさらだから、文化と隣り合わせた
アートを標榜する僕たちが、このテー
マを選ぶことになったのは当然の成り
ゆきである。三年間に亘る「あなたと
どこでもアート」のプロジェクトでは、衣と食と住の三つに分けて、一年毎の主
題とすることになった。古くは真知子巻
きやサブリナパンツがあって、美味しん
ぼに料理の鉄人、そしてビフォーアフター
と、娯楽の世界でも衣食住の順に流行っ
てきた。だから素直に企画をたてるならば衣
から入るところを、初年度は住から始め、し
かも食へと逆順に辿るのではなく、二年目の
今年度は「着がわりプロジェクト」と衣へ飛ぶ
ところなどは、へそまがりが集まるSMFの
面目躍如といったところだったろうか。しかしあらためて衣食住を見てみると、生
きるためにはどんな動物も食べなくてはなら
ないし、蜂のハニカムや蜘蛛の巣をみれば、彼ら
は優秀なアーキテクトである。だとすると、衣
こそがほかの動物にはない人間特有の文化な
のであろう。「衣と体のせめぎあい」で衣装を競い、
「時間のきものプロジェクト」で樹木か
ら写した影に季節を味わう。そして「**ききが
わりをきかえる**」では軸組に纏う裂地
を着がえることで思わぬ状況の変化を験すこ
とになった。たしかにふり返ってみると、即
物的な住にも本能的な食にもない、いかにも
人間らしい衣のプロジェクトを次々に楽し
んだ一年間だった。

(K・M)

衣と体、プロとアマの「せめぎあい」

SMFには、プロとアマが混在しています。このアマチュアamateurとは、何か
をものすごく好きな人ということです。ですから、ある分野のプロが専門外の
アートのアマだったりします。その混在が、新しいアートを創り出すきっかけになります。
コスチュームとパフォーマンスを創り出すワークショップ「**衣と体のせめぎあ
い**」は、プロとアマを混在させる試みでもありました。8月初旬の説明会では、コスチューム制作者がひびのこづえさんからの容赦のな
い質問を受け、数名がリタイアしたものの、16名がそれぞれ選んだパフォーマンスと個
別に打合せやフィッティングを重ねていきました。9月に中間発表。ひびのさんの指摘はきびしく、しかし、それは制作者も周囲も納
得するものでした。完成まじかの作品を最初から制作しなおす人もいました。この2回の大事な会合にも、10月11日と続く各地でのお披露目会場にも来られ
ず、SMFで依頼したパフォーマンスとの打ち合わせもかなわないが、どうしても参加し
たいという方がいました。大劇場の衣装部で働く方です。「参加は無理でしょう」「い
や何とか」とメールや電話でのやりとりが続きました。メールは100本を超えました。半
端ではなかったのです。ひびのこづえさんが好き、衣装を作るのが好き、という度合
いが。結局、パフォーマンスについてはご自身が危険を承知でネットで募集、夜中に
都内のスタジオを借りて撮ったフィッティングの写真や動画をひびのさんに送って見
ていただくことになりました。衣装材料費の一部は実行委員会から補填されましたが、それ以外にかなりの出
費があったものと思われま
す。そうしてできたのがコス
チューム「**拉麺**」でした。今回のワークショップで
は、ねらい通り、このような数
多くの「せめぎあい」がありま
した。最後まで、こんなことが
実現できるのだろうかという
不安をいだきながら、その風
景を次々に目の当たりにで
きたことはアマチュア世話人冥利に尽きます。各地でアーティストと時間を共にするワークショップが大はやりです。プロのアー
ティストにも「作品を観たい、買いたいと思わせる」技量だけではなく、アマチュアの「と
んでもないがんばりを引き出す」くらしい力量が求められています。SMFというアートプラットフォームを往き来しているプロとアマたちは、これまで、数
千本の風車をはじめ、数多くの見たことのない風景を創ってきました。今年もご期待
ください。(S.Y)

「時間のきものプロジェクト2015」を終えて

「時

間のきものプロジェクト2015」は、
写真作家の筆者と衣裳家の田村香織
さんのアイデアが組み合わさり、実現しました。プロジェクトの主な内容は、写真の古典技法
を用いて、布に春夏秋冬それぞれの季節の時間
を太陽光で焼き付け、着物をつくりまします。感光
液をつくり、布に塗布し、満開の桜の下や、夏の
青々と茂る葉、紅葉した落ち葉を直接布の上に
配置し、フォトグラムを制作します。こうして
得られた二次元の写真が着物となることで三
次元の造形になります。また仕立て上げられた
着物をダンスサーが身に纏うことで、季節の時間
や空間を造形素材とした『**時間がおどる**』
というダンス作品にも発展しました。ダン
サー・黒田なつ子さんと幅田彩加さん、音楽松
本一哉さんによって、夏に北浦和公園で、秋に
別所沼会館で公演されました。着物の制作や
ワークショップ、ダンス作品のリハールなどど
何度も会場に通ううちに多くの公園利用者の
方々と交流できたことも一年間のプロジェクト
を通して得られたかけがえのない時間でした。
SMFは多様なジャンルの表現者が集う
アートのプラットフォームです。「時間のきも
のプロジェクト2015」は、異なる表現者が繋
がり、お互いのアイデアや創造力を合わせる事
で新たな表
現へと発展し
ていくSMF
ならではのプ
ロジェクトに
なりました。
最後に一年間
の御支援・ご
協力いただき
ました皆様に
深く御礼申
し上げます。

(S・A)



アート長屋と宝船展の船出

昨年の大晦日、紅白歌合戦も終わりに近づきそろそろ除夜の鐘が聞こえてようかというひととき、インターネット上の「SMFアート長屋」(<http://artnagaya.jp>)に設けられた物置＝蔵で「宝船展 on the net」が開幕しました。

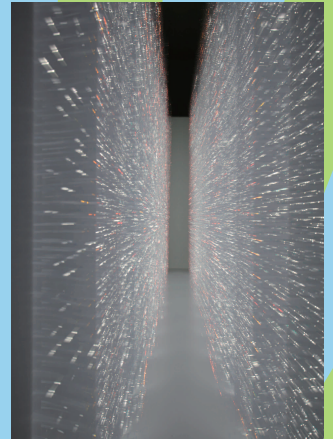
プロ、アマを問わずアート好きが集まってネット上のプラットフォーム作りをめざす「アート長屋」も昨春の誕生後、順調に住人を増やし、そろそろ第一棟が満室になろうかというところです。美術、建築、音楽、文学など多彩なジャンルの変人?が集まるSMFのメンバーやこれまでSMFのアートプログラムに協力してくれたアーティストもいますが、友だちの友だちやまだ会ったことのない方々も入居してくださるようになりました。長屋のサイトで表札代わりの作品を見てどんな人だろう、会ってみたいなどドキドキすることもしきりです。

そんな中で物置にしまってあった作品やアイデア、アートにまつわるお互いの夢を見せつこうとはじまったのが、この「宝船展」です。プロのアーティストからアマチュア、学生まで25組の参加者が集まり、オープンしました。アイデアスケッチ、ドローイングから、プロジェクトの提案や記録・紹介、音と音楽の境界を探る作品の提案、光を素材にした本格的なインスタレーションまで、多彩でみどころ満載の展覧会となりました。(現在も開催中。上記のトップページからお入りいただき、感想などお書き込みください。)

この「宝船展 on the net」と連動して埼玉県立近代美術館で1月13日から17日まで「宝船展@MOMAS」を開催しました。「on the net」にエント

リーした25組の方々が、実際に作品やアイデアを持ち寄ってリアル空間で行う賀詞交歓会兼作戦会議のような位置づけです。12月半ばの告知から一月足らずと準備期間も短く、500㎡を超える地階の一番大きな展示室が会場ですから、最初は空間が埋まらず半分に区切って使おうかとも考えておりましたが、年末年始の期間中、参加されたみなさんから次々と意欲的な作品プランが届き、結局は予定の空間以外に次の間的なスペースも使っての見応えのある展示となりました。「アートの風車、アンコール」の声を受けた新インスタレーションプランや2016年の「食」のテーマに絡む作品なども展示されました。会期中には、出品作家によるギャラリートークも行われました。

この「宝船展」、実はアート関係者の交流と新たな企みの誕生をめざした「SMFラウンドテーブル」が、「さんすび展」、「アートのまつり」と姿を変えながら発展してきたものです。これまでもこうした場で提案された企画がいくつも実現してきました。今回も「宝船」から降り立った七福神が夢にどんなかたちを与えてくれるのか大いに期待されます。(M.N)



▲佐藤仁美さんの《Sense of Field》(部分)



▲時間のきものについて語る SeeSew 田村香織さん



▲プレゼンする「やまなしの体温実行委員会」のみなさん



▲会場中央に置かれた石上城行さんのインスタレーション

連携美術館情報

入間市博物館アリット

「アリットの雛まつり」(報告)

アリットのエントランス・回廊にひな祭りの飾り付けをし、桃の節句の季節を盛り上げました。

「わが家の雛人形」2/13～3/13

一般の方より応募いただいたそれぞれの思い出のあるひな人形を飾りました。

「館蔵の雛人形」2/24～3/20

入間市博物館で所蔵する雛人形の中から、御殿雛を中心に飾りました。

川口市立アートギャラリー・アトリア

開館10周年記念事業第1弾

「ここにもアートかわぐち」3/19～5/14

今、まさに発展を遂げているまち・川口で、みずみずしい感性のアーティストたちの表現があふれだす!アトリアから飛び出した作品たちが、市内の様々な場所に出張します。芸術文化にもっと触れられるまちを目指して活動してきて10年目、アトリアからアットホームなアートに出会う「まち歩き」のご提案です。

川越市立美術館

タッチアートコーナー「小野養豚展 ...pigeep...pigeep...」1/5～3/27



展示作品に手を触れて鑑賞できるタッチアートコーナー。今年度を締め括ったのはSMFとも縁が深い小野養豚さんの展示です。集団で生活する豚たちに人間の姿を重ね、命あるものを食して生きる現実を問う作品。外光を透過するポリエスチル樹脂の色が温もりを感じさせ、慈しむように頭や背を撫でる鑑賞者の柔らかな手つきが印象的でした。「誰もが気軽

に楽しめる美術鑑賞の導入となることを願って、毎度親しみやすい作品を選んでいきます。」と学芸員の濱田さん。多彩な体験ができるよう素材のバリエーションを考え、作家とも相談しながら展示の工夫を重ねてきたそうです。開館当初より築かれてきたアートの入口がどんな展開を見せるのか、これからも楽しみです。

埼玉県立近代美術館

「ジャック＝アンリ・ラルティエグ 幸せの瞬間をつかまえて」4/5～5/22

自分の楽しみのためだけに、古き良き時代のフランス文化や愛するものたちとの時間を記録し続けたジャック＝アンリ・ラルティエグ。^偉大なるアマチュア写真家^と呼ばれたラルティエグの子ども時代からの代表作品と、日本初公開のカラー作品など約160点を紹介します。(A.O)

